

【書評】

竹中豊著

『ケベックとカナダ』彩流社、2014年

TAKENAKA Yutaka, *Le Québec et le Canada*, Sairyu-sha, 2014.

丹羽 卓

NIWA Takashi

ケベック研究には、2つの大きなアプローチの方法がある。1つはカナダを参照軸にするもの、もう1つはフランコフォニーを参照軸にするものである。前者の場合、当然ながらカナダの中のケベックという観点から、両者の共通点・相違点や両者間の緊張関係などが問題とされる。後者では、ケベックのフランス語およびフランス語社会・文化とケベック外のそれとの関係が関心の対象となる。言うまでもなく、その両方のアプローチがケベック研究には重要な意味を持ち、両者が相互に影響を与えながら進められていくべきであり、両者の出会いと交流の場として日本ケベック学会には大いに意味がある。

その日本ケベック学会の構成員を見渡してみると、2つの流れのうちどちらかにはっきり区別できるものではないだろうが、その研究者がどちらかに軸足を置いているということはある程度見てとれる。そして、日本においてカナダを参照軸とする研究者の代表的存在が本書の著者である点に異論はないであろう。著者はその長い研究生活において、絶えずケベックをカナダから、あるいはカナダをケベックから見続けてきたことは本書のタイトルがまさしく示している通りである。そしてその愛情の向う所は少しだけケベックの方が大きいのではないかということも、タイトルから推察できる。

著者には『カナダ 大いなる孤高の地』（彩流社、2000年）という著作があり、それが1980年代～90年代の研究をまとめたものであるとするなら、本書は2000年以降の約10年間の研究の総括と言える。だが、それだけではない。本書には、その研究生活のほとんどをケベック研究・カナダ研究とともに歩んだ著者の振り返りという内容の論考も含まれるからである。1978年の日本カナダ学会の設立に携わり、そしてその30年後の日本ケベック学

会の設立にも大きな働きをされ、両学会で副会長や理事などを長く務められたことだけでも、著者が日本のカナダ研究・ケベック研究の歴史の証言者に相応しいことがわかる。長年地域研究に携わってきた著者が、地域研究とはどのようなものだと考えて研究を行ってきたのか、そしてそれを次の世代にどのように伝えようとしているのか。そんな観点から本書を読むのも有意義なことだと思う。

それでは本書の内容を、コメントを加えながら見ていこう。本書は4部からなっており、各部が3～6の章でできている。といっても、各章は約10年の間に学術雑誌や学会等のニュースレターなどに発表されたものであるため、有機的なつながりがあるわけではない。それゆえ4つの部へのまとめ方に若干の無理があるとしても、それはいたしかたのないことであろう。

「カナダ／ケベック研究事始め」と題された第1部では今日のケベック研究の基本的なテーマのうちの2つ、多様性（第1章「多文化共生を語る」）とライシテ（第2章「ケベックにおける“開かれたライシテ”」）が取り上げられており、ケベックがそれらに関する実験場であるとの認識が示される。第3章では、現在のカナダ研究が直面している課題が整理されている。第1部で特筆すべきは、第1章でケベックと日本の関係史に触れられている点である。それによれば20世紀初頭の日本のカトリック修道会による100余りの宗教団体のうちの24がケベックのもので、多数の司祭・修道女が派遣された。また、本書には触れられていないが、ケベックの修道会が設立した学校も日本各地に少なからずある。この面でのケベックの人々の日本への貢献はさらに深く追求されるべきであろう。各修道会や学校ではそれがまとめられているのかもしれないが、その総合的な学術研究が必要である。そしてその研究の適任者は、歴史研究者であり、ケベックのカリタス修道会が設立したカリタス女子短期大学で長く教授職を務める本書の著者ではないだろうか。

第2部「カナダとは？ケベックとは？」ではその歴史研究者としての著者の顔が見られる。17世紀後半から18世紀前半にかけてフランスからの植民者が西進した経緯とそれに対するフランス王室の政策をめぐる議論が展開される第1章「ヌーヴェル・フランス史における西部進展」、カナダ文学の誕生を語る第2章「カナダ——神話不在の文学的世界？」（探検文学に着目しているのが興味深い）、さらにケベックのカトリシズムを考えるためにその起源である17世紀に遡り、「ケベックにおける『手紙文学』の始祖」とも呼

べるほど膨大な手紙を残した修道女マリー・ド・レンカルナシオンについて述べた第3章「ヌーヴェル・フランスとその歴史的遺産」。いずれもフランスの植民地時代を扱った論考で、ケベック研究の基礎的教養として知っておくべきことであろう。とかく現代ケベックに目が向きやすいケベック研究であるが、カナダのマルチカルチュラリズムに対抗して、なぜケベックがフランス系ケベック文化を統合の中核に据えるインターカルチュラリズムを主張するのかという現代的問題の理解のためにも、知っておくべき事柄がわかりやすく述べられている。首都オタワについてのエッセイ的な第4章を経て、現代ケベックとカナダに関するふたつの論考が続く。第5章「アイデンティティの“危機”か新しい“調和”か」と第6章「ケベックとカナダ」である。ブシャール＝テイラー委員会の報告書を紹介した前者も、カナダ下院でのケベコワ・ネイション決議成立の経緯とその意味を説明した後者も、事態が起こって時を置かずに書かれた点に注目したい。詳細な分析や批判・検討そして評価には時間を要するものである。それはもちろん重要な研究であるが、このふたつの論文の即時性もまた評価されて良い。扱っている問題がアクチュアルであるだけに、それを紹介しその時点での検討を加えるということは非常に重要だと考えるからである。

質量ともに本書の中核をなすと思われるのが第3部「表象から探る」である。評者はここを最も興味深く読んだ。そこで扱われている領域について評者が全く無知だということも1つの理由であるが、地域研究を絵画および歴史地図を通して行うという面白さが大きな理由である。まず第1章「アンリ・ジュリアンの描いたカナダ」で、19世紀末～20世紀初頭に活躍したケベック市生まれの画家・イラストレーターであるアンリ・ジュリアンが取り上げられる。彼はケベックのみならずカナダ西部にも住み、描いた対象は広くカナダに及び、カナダが西に向けて大きく拡大した時代を背景に彼の作品は描かれている。この論考は美学的視点で作品を分析・批評するのではなく、むしろそれを通して当時のケベックおよびカナダ社会を見、画家本人のみならず当時の人々のものの見方、そして歴史観（彼は歴史画も描いている）を探り出そうとしている。そして著者はこの画家を「ケベックを、カナダを、そして自己の精神的アイデンティティを、絵画を通して模索し続けた人物だった」と結論付けている。

次の第2章「歴史像の“発明”」では、カナダの地図が歴史的にどのように描かれたかを辿り、さらには地図に描かれた先住民や宣教師たちのイラスト

ト画を通して当時の人々の先住民像の変遷が描かれる。地図はカナダについてフランス人が抱いたイメージを表現するものとして読み解かれていくのだが、その「読解」がとても興味深い。さらには新大陸の動物、特に富の源泉であるビーバーがフランス人によって描かれた様を見ることによって、18世紀頃の彼らのフランス領北米へのイメージが、リアリズムではなく夢想と誇張だったことを明らかにしている。そして「新世界は“発見”されたのではなく“発明”されたのだった」というこの章の結びの言葉が印象深い。フランス人は北米大陸の実態を描くのではなく、彼らのイメージに合わせてそれをつくりあげたということである。これはフランス人に限らず西欧人が西欧外の世界に対して抱くオリエンタリズムの1つの表れと言って良いのかもしれない（これは評者の印象であって、著者がそう断じているわけではない）。

第3章「絵画とアイデンティティ」は、19世紀ケベックの画家ジョセフ・レガレに焦点をあてて、ケベックのアイデンティティがどのように再構築されていったのかを描いている。1763年にイギリスの支配下に入ってから政治史や文化史を踏まえ、レガレが活躍した背景が描かれ、その作品の紹介がなされる。その場合も、社会との関わりを絶えず意識した記述となっているのが、著者の面目躍如たるところであろう。そして、この時代のケベック文化はイギリス系支配のもとで意気消沈していたわけではなく、1960年代の「静かな革命」への文化的蓄積期にあったのではないかという著者の大胆な結びの言葉の是非を云々する素養が残念ながら評者にはないが、このテーマに関してはさらに深い研究がなされるべきではないかと思う。

第3部の最終章「美意識におけるケベックと江戸文化」は、2001年ポーランドで開催された第1回カナダ研究国際会議において著者が行った報告に基づいている。19世紀ケベックで活躍したオランダ生まれの画家コルネリウス・クリーゴフの紹介と、その風俗画と浮世絵の比較を試みたもの。短い論考のため議論が尽くされているとは言い難いが、興味深い問題を提起している。それは日本におけるケベック研究での比較研究の重要さである。日本でのケベック研究の日は浅く、研究者の数も限られているため、文化領域に限らず、とうてい日本とケベックの比較研究まで手が回っていない状況である。日本の研究者がケベックを研究する際には、日本というものが視野に入って来るのが当然だということを、この小論は教えてくれる。そして、今後日本を参照軸に置いたケベック研究が進展することを願う。

本書の最後となる第4部は「地域研究者の独り言」と題されている。ここでは著者が長年携わってきたケベック・カナダ研究への熱い思いが語られている。第1章「ケベック研究の面白さ」では、ケベック研究の意義が地域研究の視点から簡潔に述べられている。その中の言葉「見方によっては、カナダ人でもケベック人でもないわれわれこそが、ケベック研究あるいはカナダ研究を冷静に捉えうる立場にある」には、まさに同感である。とかく対立関係になり、なかなか相互理解がうまくいかないケベックとケベック外のカナダを第三者の立場から見ることこそ、日本におけるケベック・カナダ研究の存在意義があると評者も考えている。

第2章「カナダ研究はどこへ行く？」は圧巻である。最初にも触れたが、著者はこれまでの研究生生活のほとんどをカナダ研究にささげると同時に、日本のカナダ研究の生き証人でもある。もはや余人をもってしてはこの内容は書けないのではないか。ここでは、カナダ研究がカナダで開始された経緯、日本も含めたカナダ外でのカナダ研究の誕生と進展、カナダ研究の国際連携を目的とする国際機関である「カナダ研究国際協議会」の発展、そして近年のハーパー政権下での文化外交政策の変更が世界のカナダ研究に与える影響、そして最後にカナダ研究の展望が語られている。本書の最終章である「カナダ研究の今昔」は副題に「若きカナディアニストへ」とあるように、これまでカナダ研究の重要な担い手であった著者から若い後輩へのメッセージである。そこに掲げられた3つの心得とは、「創造的イマジネーションを持って」「カナダ研究だけをやっていては駄目」「カナダ研究は日本研究である」。以上の点はこの書評の中でも触れてきたことだが、著者自身がその研究生生活において実践してきたことであり、その見本が本書なのである。

最初に述べたように、本書は様々な場面で発表された論考をまとめたものである。したがってテーマの一貫性に欠けるのはいたしかたない。文体も章によって異なるのもまた、発表の場が違う以上当然である。テーマの掘り下げの度合いや記述の詳細さについても様々である。それにもかかわらず本書には統一感がある。それを生み出しているのは、著者がケベックとカナダに向ける愛情の深さなのだろう。

本書を通読して痛感したのは、ケベックやカナダに関する己の教養の幅の狭さである。評者の専門に関わる部分は承知していても、全く知らない領域が多々あり、眼を開かれた思いが強い。幅広い教養に裏打ちされた地域研究の重要さは、本書でも強調されている。専門性が高度になる程、とかく狭い

領域に関心が集中しがちである。しかし地域の特性はどれか1つだけを掘り下げてわかるものではなく、多方面への関心があってこそそれが見えてくる。著者は長い研究生生活を通して、そのことを身をもって実践し、自身が見いだしたケベック像・カナダ像を前書および本書を通して見事に提示された。評者も己の浅学を恥じつつ、その姿を追いかけていきたいものだと願っている。そして、これまでに指摘したように、本書には興味深い問題提起がいくつも見られる。それに応えていくのもまた、われわれ後続く者の責務なのであろう。

(にわ たかし 金城学院大学教授)